

ホタルは治運とその兄弟たちの孝心をはかり、日ごろから親思いの治運にだけ恵みをたれたのだ。この手の話には、ふだんから善心や孝心を養っていると、きっといいことがありますよという教訓がたぶんこめられている。

ホタルの光で本は読めるか

「蛍の光」は日本の卒業式などで明治時代からうたわれてきたなじみの唱歌だ。原曲はスコットランド民謡だが、冒頭の歌詞「蛍の光、窓の雪」は、中国の故事に由来している。

今から千六百年ほどまえの東晋代のこと。車胤（しやいん）（？～四〇一年？）は幼いころから学問が好きだったが、家は灯油を買う金にもこと欠くほど貧しかったので、夏がくると練り絹の囊（ふくろ）に数十匹のホタルを入れて灯りにし、夜を日について書物を読んだ。孫康（そんこう）（生没年不詳）もまた貧しく、冬は雪明りをたよりに夜ふけまで勉強にいそしんだ。苦学したかいがあつて、成人したふたりは高官にまで出世した。困難にくじけず学問に励む大切さをしめす手本として、古来、中国の読書人たちが好んだ美談である。「蛍雪の功」という成語もここから生まれた。

しかしそのいっぽうで、この故事には懐疑的な人も少なからずいた。ことに怪しまれたのがホタルの光である。清朝の名君・康熙帝は、『康熙字典』や『古今圖書集成』を編纂させるほど学問熱心な皇帝で、みずからも万巻の書を読んだが、古典のなかには眉唾物もあるのでないか、たとえ

ばホタルの光なんかで本が読めるものだろうかと疑いを抱いてもいた。

そこであるとき、側近に百匹あまりのホタルを捕ってこさせ、実際に絹の囊に入れて試してみたところ、文字を判読することすらできなかつたので、車胤の故事は嘘っぱちであると断じた。宣教師を身近におき、西洋の幾何学や医学、天文学、音楽までを貪欲に吸収した康熙帝らしい実証的な態度である。「腐草、螢になる」説は儒学者らに擁護されつつ、西洋の近代科学が本格的に普及する二十世紀初頭まで揺るがなかつたが、「螢の光」の方は早くも十七世紀には妄説だと決めつけられてしまったのである。

しかし皮肉なことに、事實は逆だつたようだ。天体観測の邪魔になるほど光があふれている現代になつて、あえてホタルの光で本を読む実験をした人が少なからずいる。彼らの報告によれば、「読める」（見える）のだ。たとえば大型で強い光を放つタイワンマドボタルを使った実験では、二十四程度ですでになんとか文字が判読できたという。百匹でも読めなかつたという康熙帝が使つたのは、北京の紫禁城周辺に生息する光の弱い種類のホタルだつたのだろうか。

「螢の光」の故事があながち嘘でないことは証明されたが、だからといって車胤のとつた方法が賞賛に値するかはべつの話だ。読めるかいなかはともかく、ホタルを光源にした読書が非現実的であることに、人びとはとつくに気づいていた。こんな笑い話がある。

ある日、孫康が車胤の家を尋ねた。留守だったので、門番に「車胤殿はどこらへ」と聞くと、答えていう。

「へえ、主人は早朝から草むらに蛍を捕りに出ておりました」

後日、今度は車胤が孫康の家を訪ねると、庭のまんまかに孫康が心配そうな面持ちで立ち尽くしている。

「おや、机にも向かわず外でぼんやりしておいでは。こんなに天気の良い日に、なにか気がかりでもおありですか」

「それなんですよ。どうやら今晚は雪が降りそうになくて」
(明・馮夢龍^{ふうぼうりやう}『笑府』)

小さな布袋に大量に詰め込まれたホタルは当然すぐに死んでしまうから、毎日毎日、ホタル捕りにいかなければならない。のん気に勉強などしている場合ではないのである。夏のあいだはまだいいとして、それ以外の季節はどうするのか。そもそもホタルが発する光はともりつばなしではなく、一定の間隔で明滅している。このような灯りのもとで書物を読むのはまことに難儀である。車胤の向学心は立派だが、ホタル捕りについやす労力と時間を考えたら、めったにすすめられる方法ではないのである。『笑府』は明代の末に中国古今の笑い話を集大成した本なので、すでに明末以前から人びとは蛍雪の故事を痛烈に笑いとはばしていたと考えられる。